
魔導学園の頑張らない少年

暇な青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導学園の頑張らない少年

【Nコード】

N0714BA

【作者名】

暇な青年

【あらすじ】

魔導と言つ名の魔法が存在する世界『エルテミス』。そこにある魔導学園で少年、如月 柊羽とその仲間たちが織り成す学園ファンタジーです。この小説は主人公最強(?)の上にハーレムエンド(?)の方向で進めますので苦手な方は読まないことをお勧めします。

第一魔導 主人公不在？（前書き）

あけおめで〜す！

マイページの『活動報告』にも書いた通り今年はこれ一本で頑張っ
ていきますのでよろしくおねがいします。

第一魔導 主人公不在？

夜の街並みで一つの影が現れた。

影を見るからに背中には身の丈ほどの馬鹿でかい刃物を背負っている。

その影は前方……といっても、まだ数メートル先だが集団があった。どうやら酔っぱらいのおっさん達だ。それを見た影は夜の闇に溶けるようにその場から消えるのであった。

不敵な笑みを浮かべて

時刻は次の日のお昼。場所は魔導学園の二年B組。

そこでは窓側を陣取るようにそれぞれの机を合わせ、一つのテーブルにしている。その上に寮から持ってきた弁当や購買のパンなどを出し合っては食べている。

「そーいや、柊羽の奴いねえーけどどこに行った？」

赤髪で前の方がツンツンヘアー。さらには世間一般ではイケメンに分類される程のカッコいい面構えの少年 鋪原（しほはら） 直登（なおのぼり）は即席テーブルを眺め、いつも居る箸の柊羽がいないことに気付いた。

「ああ、如月君なら」

口に焼きそばパンを銜（くわ）えた直登の、向かい側で弁当に箸を向けてい

た少女は横の三人席の真ん中を見て、口を開いた。

「今日はお弁当を忘れたらしく、購買に走っていききましたよ」

薄紫のロングヘアへアールに出るところは出ている美少女
夢河 菜月
おっとりとした性格で男女、特に男子から人気である。

今さらだが即席テーブル（縦長）の席順を説明しよう。

黒板を前に左側は窓際にピッタリとくっつけ、後ろでは直登が一人で座り、前の方に菜月が座っている。で、右側の方は三人席だが、その真ん中が開いている。

「まあ、あいつの事だから何とかなるだろ」

「逆でしょ。あいつの事だから何ともならないでしょ」

右側席の真ん中から左隣に座っている茶髪ショートヘアの少年

鞘魏 剣呉は他人事のように箸を動かしながら言うと、またまた真ん中から見て右隣に座っている朱色の髪を頭の上でまとめポニテールにしている少女
天城 美緒は箸の先を剣呉に向けた。

さらに言うと二人とも美男美女。

ハッキリ言って二学年の美男美女はこの四人である。さらにはファンクラブまで存在すると言うアイドル的存在。だが、それを超える生徒がまだ二人いる。

一人は一年生の藤海 智香。
もう一人は三年生の藤海 凜。
苗字を見ての通り二人は姉妹である。それも美人姉妹である。

「さて、あいつが何買ってくるか何買ってくるか賭けるか？ 剣呉」

剣呉の方を見て、直登は挑発するようにニヤニヤするがいつもの事。
なぜなら

「いや、賭けにならないだろ……何せあいつは」

「……頑張らないからな(ね)」「……」

声は見事にハモリ、四人は笑って柊羽が帰ってくるのを待つのだっ
た。

そのころ柊羽は

「はつくしゅっ!」

くしゃみをしていた。購買部の前で。なぜ購買部に行かないか
と言つと正確には行けないのだ。
男女関係なく購買部に押し込み乱闘状態。これが魔導学園購買部の
お昼である。そして柊羽はそれが終わるまであくびをし、気長に待
つのであった。

その容姿は男としては長い黒髪で、後ろ髪は首を隠すほどである。
面構えは覇気が無く、性格はよく言えば冷静沈着。悪く言えばやる
気が無い。

そしてあの四人と一緒にいるためよく思い違いされるが少年
如月 柊羽は至って普通の少年であり、美男では無い、と言つ事だ。

第一魔導 主人公不在？（後書き）

感想や評価お待ちしております。

第二魔導 実は留年しかけた柊羽？（前書き）

すいません。

二話目からいきなり話があらぬ方向に行ってしまいました。

第二魔導 実は留年しかけた柊羽？

昼休みの半分の時間が経った頃、やっと帰ってこれた俺は腕で抱くようにして抱えたパンを机に置き真ん中の席へと腰を下ろした。それを見ていた直登達はやつぱりな、と口をそろえて苦笑した。

「んあ？ どうしたよ、いきなり笑って」

「いやなに。お前が買ってくるのが予想道理だったんでな」

直登が未だ苦笑しながらも答えるのを見て俺はあっそ、とふてくされた様な表情をして買ってきたコッペパンの袋を開ける。コッペパンの袋にはイチゴジャム、ブルーベリージャム、メロンソーダジャムと書かれおり、俺が今、口にしているのはイチゴジャム味である。

「あら、メロンソーダ味なんてあるの。初めて知ったわ」

「ああ、なんか今日から発売だったらしいから買ってみたけど

」

「美味しそうじゃん！ 私が貰うよ」

と、有無を言わさず菜月が眺めていたメロンソーダ味のコッペパンの袋を開けた。当然、俺は慌てて止めようとしたが直ぐにやめた。なぜなら

「ふおら、ふふにあふいらめふくふえやめふあほつふあいいふお」

「いや、何言ってるかわかんねーし」

美緒が食う方が早いことに気づいたからあきらめた。

美緒が口に頬張ったまま喋るのを見て、ため息を付く。菜月はあはは、と困った様子で笑い、直登と剣呉は視線だけ向けてトランプをしていた。そこでごつくん、と頬張っていたパンを胃に入れてから美緒は人差し指をビシッと突き立ててきた。

「だから、そーやって何でも諦めるの止めたら。それだから留年しそうになるんだぞ」

そこまで言われて俺は苦笑し、先々月の事を思い返す。

この魔導学園では名前の通り魔導　つまり魔法を扱う学園である。魔導学園と言っても普通の高校生の授業もするため通常の筆記テストと魔導の実技テストを合格しないと進級できない。が、俺に至っては筆記はそこそこだが実技がんでダメである。進級テスト（実技）なんて4回も落ちてしまった。それを助けたのがこの四人なんだが……。

何とか言って先生に最後のチャンスをと頼み込んで5度目のチャンスをもらいやっとの事で合格したのだ。

流星の先生たちも二学年で優秀な成績を残している四人に頼まれたら断れなかつたらしいな。

で、話を戻す。なぜここまで俺が落ちるかと言うと　とにかく頑張らない。言い方を変えれば努力をしないのだ。前に菜月と直登が聞いてきたが俺はそれをはぐらかしてその場を切り抜けた。

「まったく……そーだ。いいこと思いついたぞ」

記憶を遡っていた俺は美緒の手を合わせる音で現実に戻ってきたが

同時に不安を覚えた。

うわ……美緒のいいこと思いついた、は俺にとっては悪いことなんだがな。

まだ何も聞いていないが長年の付き合いですでに自分の身に危機が迫っていることを肌で感じ取った。

美緒は、と言うと隣にいた菜月に耳打ちしていた。どーやらまだ教えてくれないらしい。それなら……、とトランプをしている直登と剣呉に顔を向けた。

「おーい、親友。俺の身に危機が迫ってるんだが助けを……」

「いや、お前は少し頑張りを覚えた方がいいな。俺としてはそっちの方が助かる……直登、悪いな。フルハウスだ」

剣呉は手札を机の上に並び置いた。それにピクツと眉を動かした直登はトランプで隠した口元が微妙に見え、ニヤついているのが分かった。

「俺も同意見だなあ、柊羽。あれだけの才を持っていながら何でがんなばらねえんだ……つと！」

剣呉の出したカードの上に直登は手札のカードを叩きつけた。そこには8のカードが4枚にスペードの1。つまり

「なっ
フォーカード、だと!？」

「まいどあり」

べ口を出して勝者の笑みを浮かべる直登に肩を震わす剣呉。だがその隣でもつと肩を震わせているのが俺であるのは言つまでもない。

「くっ、仕方ない。明日の昼飯だったな」

「ゴチになるぜ」

どうやら明日の昼飯を賭けて勝負していたらしく剣呉はぶつくさと文句を言いながらランプを片付け始め、直登はしゃーなーな、と声を掛けてきた。

「実際問題、お前あの時俺たちが頼まなかったら留年してたんだぞ。恩を感じる恩を」

「いや、それは感謝してるが……それとこれとは話が」

「一緒だ！」

「うぐっ！ 美緒……」

いつの間にか話が終わったらしく美緒と菜月が視線を向けていた。

「いい！ あの時私たちが頼まなかったら柊羽一人で今も一年生やつてるんだぞ？ そんなの嫌だろ！？」

いつになく真剣な美緒に髪を掻いてしまう。どーやら理由はわからないがご立腹のようだ。

「悪かった。悪かったからそんな今にも泣きそうな顔するな」

「ふえ？」

お前……無意識かよ。菜月に確認してさらに鏡を取り出して確認して……ん？ 勢いよく教室から出て行……と、思ったら帰ってきた。どうやら廊下の水道で顔を洗ってきたんだな。

「んで、何がそんなに悲しいんだ？ 仮に俺が留年しても会えなくなるわけじゃないだろ」

俺としては疑問に思ったことを聞いたつもりだったが周りの直登達はあくあ、とため息を付くのが俺にもわかった。美緒にもムツ、と睨まれそのまま知らない、と顔を背けてしまった。

「だって……学年が離れたら会う時間がなくなっちゃうじゃん」

「ん？ なんか言った？」

顔をそむけたまま美緒が何かを口にしたことは分かったがうまく聞き取れなかった。

「何でも無い！！ それより午後の魔導実習は私と菜月の班でやつてもらおうからな！」

「うげっ！？ マジかよ……直登さ〜ん」

「いいんじゃないの」

「……剣呉さん？」

「良かったじゃないか、充実した授業になりそうだな」

二人の反応は予測した通り……いや、それ以上のニヤニヤ顔で答え
てくる。

はあ、俺には見方が居ないのかね……。

頂垂れる俺であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0714ba/>

魔導学園の頑張らない少年

2012年1月2日10時45分発行